

孟子曰，舜之居深山之中，與木石居，與鹿豕遊，其所以異於深山之野人者，幾希。及其聞一善言，見一善行，若決江河，沛然莫之能禦也。

孟子曰，君子有三樂，而王天下不與存焉。父母俱存，兄弟無故，一樂也。仰不愧於天，俯不作於人，二樂也。得天下英才而教育之，三樂也。君子有三樂，而王天下不與存焉。

孟子曰，雞鳴而起，孳孳爲善者，舜之徒也。雞鳴而起，孳孳爲利者，蹠之徒也。欲知舜與蹠之分，無他，利與善之間也。

孟子曰，飢者甘食，渴者甘飲，是未得飲食之正也。飢渴害之也。豈惟口腹有飢渴之害，人心亦皆有害。人能無以飢渴之害爲心害，則不及人不爲憂矣。

孟子曰，養心莫善於寡欲，其爲人也寡欲，雖有不存焉者，寡矣。其爲人也多欲，雖有存焉者，寡矣。

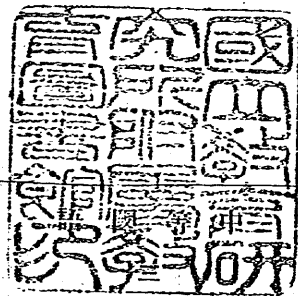
文部省訓
書局刊行
課寄贈

(後) ¥ .75

(11)

中等國語三

文部省



昭和二十一年八月二日印刷 同日發售
昭和二十一年八月六日發行 同日發售
(昭和二十一年八月六日 文部省検査済)

〔後〕定價七拾五錢

著作權所有 發行者 文部省

發行所 東京都神田區岩本町三番地
中等學校教科書株式會社

代表者 加野 庄吾

印刷者 東京都牛込區市谷初賀町一丁目十二番

大日本印刷株式會社

代表者 佐久間長吉郎

發行所

中等學校教科書株式會社

教科書番號 日ノ三

目 録

國 文 篇

一 天の香具山	一
二 あづまぢ	二
三 千曲川旅情の歌	五
四 みかん	六
五 心と言葉	九
六 敷島の道	十
七 恩賜の御衣	十三
八 オリンピック大會	十五
九 雪の研究	十七
十 國文學の傳統	二十

篇



天の香具山 新古今和歌集

春の初めの歌 後鳥羽天皇御製

ほの／＼と春こそ空に來にけらし天の香具山
すみだなびく

曉霞といふことを詠める 藤原實定

なごの海の霞のそよりながむれば入り日をあら
ふおきつしら波

詩を作らせて詠に合はせ等りしに水郷春望

といふことを 藤原秀能

夕月夜しほ満ち來らし難波江の葦のわか葉をこ
ゆるしらなみ

夏月を詠める 源頼政

庭のちもはまたかわかぬに夕立のそらさりげな
くすめる月かな

入道前關白右大臣に侍りける時百首歌詠ま
せ侍りける時ほととぎすの歌

國文篇

藤原俊成

むかし思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山ほと
とぎす

題知らず 西行法師

心なき身にもあはれは知られけりしぎたつ澤の
秋の夕暮

きり／＼す夜さむに秋のなるまゝによわるか聲
の遠ざかりゆく

和歌所歌合に湖邊月といふことを

藤原家隆

鳩のうみや月のひかりのうつろへば波のはなに
も秋は見えけり

百首歌奉りし時

吉野川岸のやまぶき咲きにけり嶺のさくららはち
りはてぬらむ

旅の歌とて詠める 藤原定家

旅人のそでふきかへす秋風にゆふ日さびしき山
のかけはし

百首歌奉りし時

駒とめて袖うちばらふかけもなし佐野のわたり
の雪の夕暮

二 あづまぢ

一

更級日記

あづまぢの道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出で
たる人、いかばかりかはあやしかりけんを、いかに思
ひ始めけることにか、世の中に物語といふ物のあなる
を、いかで見ばやと思ひつゝ、つれづれなるびるま宵
居などに、姉・幾母などやうの人々の、その物語かの
物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞
くに、いとゆかしさまされど、わが思ふまゝに、そ
らにいかでか覺え語らん。いみじく心もとなきまゝ、
に、等身の藥師佛を造りて手洗ひなどして、人まにみ
ぞかに入りつゝ、「京にとく上げ給ひて、物語の多く候
なる、ある限り見せ給へ。」と身を捨てて、額をつき祈
り申すほどに、十三になる年、上らんとて、九月三日
門出して、いまたちといふ所に移る。

富士の山はこの國なり。わか生ひ出でし國にては、
西面に見えし山なり。その山のさま、いと世に見えぬ
さまなり。さま異なる山の姿の、紺青を塗りたるやう
なるに、雪の消ゆる世もなく積りたれば、色濃き衣に
白き裾着たらんやうに見えて、山の頂の少し平きたる
より煙は立ち昇る。夕暮は火の燃え立つも見ゆ。
清見關は、片つ方は海なるに、關屋どもあまたあり
て、海までくさぬきしたり。けふり合ふにやあらん。
清見關の波も高くなりぬべし。おもしろきこと限りな
し。

田子浦は波高くて、舟にて漕ぎめぐる。

大井川といふ渡りあり。水の世の常ならず、すりこ
などを濃くて流したらんやうに、白き水速く流れたり。

二

十六夜日記

昔、壁の中より求め出でたりけん書の名をば、今の
世の人の子は、夢ばかりも身の上の事とは知らざりけ
りな。水莖の岡の菰葉かへすがへすも書きおく跡確か
なれども、かひなきものは親の諫めなり。又、賢王の

國文一覽

二

にしとみといふ所の山、繪よくかきたらん屏風を立
て並べたらんやうなり。片つ方は海、濱のさまも寄せ
返る波の景色も、いみじうおもしろし。もろこしが原
といふ所も砂子のいみじう白きを、二三日行く。「夏
は、大和撫子の濃く薄く錦をひけるやうになん咲きた
る。これは秋の末なれば見えぬ。」といふに、なほとこ
ろどころは打ちこぼれつゝ、あはれげに咲き渡れり。
もろこしが原に大和撫子しも咲きけんこそなど、人々
をかしがる。

まだ曉より足柄を越ゆ。まいて山の中の恐しげなる
ことはいはん方なし。雲は足の下に踏まる。山のなから
ばかりの、木の下の僅かなるに、葵のたゞ三筋ばかり
あるを、世離れてかゝる山中にしも生ひけんよと、人
人あはれがる。水はその山に三所ぞ流れたる。

からうじて越え出でて、關山にとゞまりぬ。これよ
りは駿河なり。よこはしりの關の傍らに岩臺といふ所
あり。えもいはず大きな石の四方なる中に、穴のあ
きたる中より出づる水の、清く冷たきこと限りなし。

人々を捨て給はぬふつりごとにも濡れ、忠臣の世を思
ふ情にも捨てらるゝものは、數ならぬ身一つなりけり
と思ひ知りながら、又、さてもしもあらで、なほこの憂
へこそやる方なく悲しけれ。

更に思ひ續ければ、やまとうたの道は、たゞまこと
少くあだなるすさびばかりと思ふ人もやあらん。日の
本の國に、天の岩戸開けし時、よもの神たちの神樂の
詞を始めて、世を治め物をやはらぐるなかだちとなり
にけるとぞ、この道のひじりたちは記しおかれたりけ
る。

さても又、集を撰ぶ人はためし多かれど、二たび勅
を受けて世々に聞え上げたるは、類ひなほありがたく
やありけん。その後にも携りて、三人の男子ども百
千の歌の古反故どもを、いかなる縁かありけん、預り
持たることあれど、道を扶けよ、子をはぐくめ、後の
世を弔へとて、深き契りを結びおかれし細川の流れも、
故なく腹き止められしかば、跡形ふ法の燈火も、道を
守り家を扶けん親子の命も、もろともに消えを争ふ年
月を経て、危く心細きものから、何として、つれなく

三

今日までは長らふらん。惜しからぬ身一つは易く思ひ捨つれども、子を思ふ心の間はたほ忍びがたく、道を願みる根みはやらん方なく、さてもなほ、あづまの龜の鏡に映さば、曇らぬ影もや顯るゝと、せめて思ひ餘りて、よろづの憚りを忘れ、身を益なきものになし果てて、ゆくりもなくいさよふ月に誘はれ出でなんとぞ思ひなりぬる。

さりとて、文屋康秀が誘ふにもあらず、住むべき國求むるにもあらず。頃はみ冬立つ初めの定めなき空なれば、降りみ降らずみ時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつゝ、事にふれて心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、行き憂しとてもとどまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。目隠れせざりつるほどだに、荒れまざりつる庭も離も、なしてと見廻されて、暮はしげなる人々の袖の半も慰めかねたる中にも、侍従・大夫などのあながちに打ち屈したるさま、いと心苦し。

代々に書きおかれける歌の草紙どもえりしたゝめて、侍従の方へ送るとて書き添へたる歌、

和歌の浦にかきとめたる藻塩草これを昔のかたみともみよ
あなかしこよこ波かくな濱千鳥ひとかたならぬ跡をおもはば
これを見て、侍従の返り事いとくあり。
つひによもあだにはならじ藻塩草かたみを三代の跡にのこせば
まよはまし教へざりせば濱千鳥ひとかたならぬ跡をそれとも
この返り事いととなしければ、心やすくあはれなるにも、昔の人に聞かせ奉りたくて、又、打ちしほたれぬ。
大夫の、傍ら去らず馴れ來つるを、振り捨てられなん名残り、あながちに思ひ知りて、手習ひしたるを見れば、
はるゝと行くさき遠く暮はれていかにそなたの空をながめむ
と書き附けたる、ものよりことにあはれにて、同じ紙に書き添へつ。

つくゝと空ながめそこひしくば道とほくと
もはやかへり來む
とぞ慰むる。

山より侍従の兄の律師も、出で立ち見んとておぼしたり。それもと心細しと思ひたるを、この手習ひどもを見て、また書き添へたり。

あだにのみ涙はかけし旅ごろもこゝろのゆきて立ちかへるほど
とは言忌しなから、涙のこぼるゝを、荒らかにもの言ひをさらはすも、さまざまあはれなるを、阿闍梨の君は山伏にて、この人々よりは見なる、「このたびの道のしるべに送り奉らん。」とて出で立たるめるを、「この手習ひにまたえじらはざらんやは。」とて書き附く。
立ち添ふぞうれしかりける旅衣かたみにたのむ親のまもりは

三 千曲川旅情の歌

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ。

緑なすはこべは萌えず
若草もしぐによしなし。
しろがねのふすまの岡べ
日に溶けて淡雪流る。
あたゝかき光はあれど
野に満つるかをりも知らず
浅くのみ春は霞みて
麦の色はつかに青し。
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ。
暮れ行けば浅間も見えず、
歌かなし佐久の草笛。
千曲川いさよふ波の
岸近き宿にのぼりつ。
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む。
(島崎春樹ノ作ニ據ル)

四 み かん

或る曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰をおろして、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈がついた客車の中には、珍しく私のほか、一人も乗客はゐなかつた。外をのぞくと、薄暗いプラットフォームにも、今日は珍しく見送りの人影さへ跡を絶つて、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時々悲しうに吠え立ててゐた。これらは、その時の私の心持と、不思議なくらゐ似つかはしい景色だつた。私の頭の中には言ひやうのない疲労と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんよりとした影を落してゐた。私は外套のポケットへじつと兩手を突つこんだまゝ、そこにはいつてゐる夕刊を出してみようといふ元氣さへ起らなかつた。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私は、かすかた心のくつろぎを感じながら、後の窓わくへ頭をもたせて、目の前の停車場がずる／＼と後ずさりを始めるのを、待つとも／＼待ちかまへてゐた。ところが、そより

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かにおびやかされたやうな心持がして、思はずあたりを見廻すと、いつの間にか例の小娘が、向かふ側から席を私の隣へ移して、しきりに窓を開けようとしてゐる。が、重いガラス戸はなか／＼思ふやうに開かないらしい。ひゞだらけの頬はいよ／＼赤くなつて、時々はなをすすりこむ音が、小さな息の切れる聲と一しよに、せはしく耳へはいつて来る。これはもちろん、私にも幾分ながら同情をひくに足るものには相違なかつた。しかし、汽車がいままさにトンネルの口へさしかゝらうとしてゐることは、暮色の中に枯草ばかり明かるい兩側の山腹が近づく迫つて來たのでも、直ぐにがつてんの行くことであつた。にも拘らず、この小娘は、わざわざしてゐる窓の戸を開けようとする。その理由が私にはのみこめなかつた。いや、それが私には單にこの小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから、私は、腹の底に依然としてけはしい感情をたくはへながら、あの霜焼けの手がガラス戸を開けようとしてゐるやうすを、まるでそれが永久に成功しないことでも

も先にけた／＼ましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何か言ひのしる聲と共に、私の乗つてゐる二等客車の戸ががらりと開いて、十三、四の小娘が一人、あわただしく中へはいつて來た。と、同時に一つずしりと搖れて、おもむろに汽車は動き出した。

小娘は、油氣のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでのあとのあるひゞだらけの兩頬を氣持の悪いほど、赤くぼてらせた。いかにも田舎者らしい娘だつた。しかも、垢じみた萌黄色の毛絲の襟巻がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きなふろしき包があつた。そのまた包を抱へた霜焼けの手の中には、三等の赤切符がはいじさうにしっかりと握られてゐた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかつた。それから、その服装が不潔なのもやはり不快だつた。最後に、その二等と三等との區別さへもわきまへないおろかな心が腹立たしかつた。だから、巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたといふ氣持もあつて、こんどはポケットの夕刊を漫然とひろげてみた。

祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。すると間もなく、すさまじい音をはためかせて汽車がトンネルへなだれこむと同時に、小娘の開けようとしたガラス戸は、とうとうぱたりと開いた。さうして、その四角な穴の中から、煤を溶かしたやうなすす黒い空氣が、俄に息苦しい煙になつて、もう／＼と車内へみなぎり出した。元來のどを害してゐた私は、ハンカチを顔に當てるいとまへなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、殆ど息もつかないほど咳きこまなければならなかつた。が、小娘は、私にとんちやくする氣色も見えず、窓から外へ首をのばして、間を吹く風に銀杏返しびんの毛をそよがせながら、じつと汽車の進む方向を見やつてゐる。その姿を煤煙と電燈の光の中に眺めた時、もう窓の外が見る／＼明かるくなつて、そこから、土の匂や枯草の匂や水の匂が、冷やかに流れこんで來なかつたなら、漸く咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、また、もとの通り窓の戸をしめさせたに相違なかつたのである。

しかし、汽車は、その時分には、もうやす／＼と

ンネルをすべりぬけて、枯草の山と山との間にはさまれた或る貧しい町外れの踏切に通るかゝつてゐた。踏切の近くには、いづれも見すばらしい葦屋根や互屋根がぞみ／＼とせま苦しくたてこんで、踏切番が振るのであらう、たゞ一りうのうす白い旗がものうげに暮色をゆすつてゐた。やつとトンネルを出たと思ふ——その時、その蕭索とした踏切の櫓の向かふに、私は、頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立つてゐるのを見た。かれらは皆この曇天に押しすくめられたかと思ふほど、そろつて背が低かつた。さうして又、この町外れのいんさんな風物と同じやうな色の着物を着てゐた。それが、汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一せいに手をあげるが早い、いたいけななどを高くそらせて、何とも意味のわからない喊聲を一生けんめいにほとばしらせた。するとその瞬間である、窓から半身をのり出してゐた例の娘が、あの箱焼けの手をつとのばして、勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心をどろすばかり暖かな目の色に染まつてゐるみかんが、おほよそ五つ六つ、汽車を見送つた子供達の上へばら／＼と空か

ら降つて行つた。私は思はず息をのんだ。さうして、刹那にいつさいを了解した。小娘は、恐らくこれから奉公先へおもむかうとしてゐる小娘は、そのふところに藏してゐた幾ばくかのみかんを窓から投げて、わざ／＼踏切まで見送りに来た弟たちの勢に報いたのである。暮色を帯びた町外れの踏切と、小鳥のやうに聲をあげた三人の子供たちと、さうして、その上に亂れ落ちる鮮かなみかんの色と——すべてが汽車の窓の外に、瞬くひまもなく通り過ぎた。が、私の心の上には、せないほどはつきりと、この光景が焼きつけられた。さうして、そこから或るえたいの知れないほがらかな心持が湧き上つてくるのを意識した。私は、昂然と頭をあげて、まるで別人を見るやうに小娘を注視した。小娘は、いつかもう私の前の席に歸つて、相變らずひびだらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きなふるしき包を抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐた。

(芥川龍之介ノ文ニ據ル)

五 心と言葉

心と心とを觸れ合はせるには、言葉だけに頼ることはできぬ。言葉は不完全なものである。二つの心の緊張が高まつて、その間にそこばくの隔りが感ぜられるやうな場合には、特にこの不完全が目立つて来る。思ふことを單純に表したつもりでも、相手がまるで異なつた方向に刺激を受けることは珍しくない。觸れ合はうとする心は、いつまでも言葉の奥にちこまつてゐて、中心を離れた問題の上に、いらだたしい神經と我執とを衝突させるのである。興奮の度が強まれば強まるほど、言葉の不完全が生みだすこの葛藤は烈しくなるやうに思はれる。

しかし、この不完全な言葉を使つても、心が何のこたはりもなくすなほに向かふへ通ずることもある。時には、その言葉の必要さへない。それが、言葉の上の詳しい説明や了解を必要とするはずの場合に於いてもさうなのである。

だから、言葉によつて心を通ずることはできぬと言

ひ切るわけには行かない。しかしまた、言葉で説明しさえすれば、心は通ずるものだと言ひ切ることもできぬ。

心が通ずるのは、心の論理が通つてゐるからである。頭の論理がいかに正確に言葉の内に現れてゐても、心の論理が通つてゐなければ、人の心を承服させるわけには行かない。

例へば、或る人の行爲に對して、非難の心持を経験するとする。その行爲の正しくないことを指摘して、それを改めさせるのは確かにいいことである。しかし、その行爲の正しくない所以をいかに明白に説明して聞かせても、それが頭の論理で押しつめられて行く間は、相手は決して承服するものでない。こちらの立場から相手の行爲を不正と判断しても、相手は相手の立場で何かしら辯解をもつてゐる。その辯解を悉く説き破つたところで、相手の心は反撥の力を強めるばかりである。純粹に理論の問題を討議するやうなぐあひには決して行くものではない。

それは人間の行爲が、その人の性格や氣質に根ざし

てゐるからである。常人にも、頭の論理だけで、自分の行爲を支配することはできない。かれが道德的反省によつて、自分の行爲を制御しようとする場合には、著しく自分の心の論理に頼つてゐる。それゆゑに、他から頭の論理で押しつめられても、それによつて行爲を改める情熱が湧いて来るはずはないのである。むしろ、かれの性格や氣質に對して十分同感してくれない相手の心情や、論理的に自分の立場を覆さうとする相手の征服慾などが、問題の焦點たる不正の指摘よりも、遙かに強い刺激をかれに與へるのである。

たとひ、忠告者の心に正義に對する情熱が燃えてゐるとしても、またその忠告が非常に正しいことであるとしても、相手がその忠告のうちに同情を感じずして、たゞ征服慾を感じるのみであるならば、忠告者の心は終に相手の心に觸れることができないであらう。忠告者が相手をよくしようとしてゐる親切な心も、かういふ場合には現れる場所がない。いかに言葉でそれを説明しても、相手の心には響かない。言葉は畢竟空である。

或る心の状態を表す言葉は、複雑な組織を土臺として現れて来る。だから、同一の言葉も、それを使ふ人の人格の異なるに従つて、それ／＼に異なつた色調や倍音を伴ふ。言葉を通して、その背後にある人格がにじみだし、ひゞきだすのである。

心を表す言葉の妙味はこゝにある。それは、單なる知識の集積によつては、いさ／＼も深められるものではない。たゞ正直に、その人の築き上げた生活を暴露する。何の假託も、虚飾をも許さない。同じ言葉を使つて同じやうな心生活を表現しようとするのは、各人の自由であるが、それによつて眞實に表現せられる心生活は、言葉が同一であるやうにたやすくは同一であることができない。

六 敷島の道 増鏡

あどろの下

御門始り給ひてより八十二代に當りて、後鳥羽院と申すおはしましき。御諱は尊成、これは高倉院第四の

様よりはなか／＼安らかに、御幸など御心のまゝならんとにや。世をしろしめすことは今も變らねば、いとめでたし。

鳥羽殿・白河殿なども修理せさせ給ひて、常にわたり住まはせ給へど、なほ又、水無瀬といふ所に、えもいはずおもしろき院造りして、屢、通ひおはしましつゝ、春秋の花もみちにつけても、御心ゆく限り世をひびかして、遊びをのみぞし給ふ。所がらも、はる／＼と川に臨める眺望いとおもしろくなん。元久の頃、詩に歌を合はせられしにも、とりわきてこそは、

見わたせば山もとかすむ水無瀬川ゆふべは秋と

なと思ひけむ

茅葺きの邸・渡殿など、はる／＼と鑑をかしうせさせ給へり。御前の山より瀧落されたる石のたゝすまひ、苔深き深山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げに千代を籠めたる霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる頃、人々あまた召して御遊などありける後、定家の中納言未だ下臈なりける時奉られける、

あり經けむもの千年にふりもせてわが君ちぎ

皇子、御母は七條院と申しき。治承四年七月十五日、生まれさせ給ふ。壽永四年御即位。御門いとよすずてかしこくおはしませば、法皇もいみじうつくしと思さる。文治二年十二月一日、御書始めさせ給ふ。御年七つなり。建久元年正月三日、御年十一にて御元服し給ふ。

同じき三年三月十三日に法皇かくれさせ給ひにし後は、御門ひとへに世をしろしめして、四方の海波靜かに、吹く風も枝を鳴らさず、世治り民安うして、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。御歌數知らず人の口にある中にも、

奥山のおどろの下もふみわけて道ある世ぞと人にしらせむ

と侍るこそ、まつりごと大事と思されけるほどしるく聞えて、いとみじくやんごとなくは侍れ。

建久九年正月十一日、第一の皇子四つになり給ふに、御位譲り申させ給ひて、ちりの給ふ。御位におはしましこと十四年なりき。今日明日二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづ所せき御有

るみねの若松
君が代にせきいる、庭をゆく水の岩こす数は千
代も見えけり

新島もり

このおはします所は、人離れ里遠き島の中なり。海
づらよりは少しひき入りて山陰にかたそへて、大きな
巖の崎てるをたよりにて、松の柱に葉替ける廊
など、けしきばかりことそぎたり。まことに柴の庵の
たゞしと、かりそめに見えたる御宿りなれど、さ
る方になまめかしく、ゆゑづきてしなせ給へり。水無
瀬殿思し出づるも夢のやうになん。はる／＼と見や
る、海の眺望、二千里のほかも残りなき心地する、今
更めきたり。潮風のいとこたかく吹き来るを聞き召し
て、

われこそは新島もりよちきの海のあらきなみ風
心して吹け

同じ世にまたすみのえの月や見む今日こそよそ
にちきの島守

けり。雲染の御衣、夜の御ふすまなど、都の夜寒に思
ひやり聞えさせ給ひて、七條院より参れる御文、引き
開けさせ給ふより、いとみじく御胸もせき上ぐる心
地すれば、やゝためらひて見給ふに、浅ましくも、か
くて月日経にけること、今日明日とも知らぬ命のうち
に、今一たびいかで見奉りてしかな。かくながら、
死出の山路も越えやるべうも侍らでなん。など、いと
多く亂れ書き給へるを、御顔に押し當てて、

たらちねの消えやらで待つ露の身を風より先に
いかでとはまし

八百よろづ神もあはれめたらちねのわれ待ちえ
むとたえぬ玉の緒

七 恩賜の御衣

大 鏡

醍醐の御門の時、時平のちとゞ左大臣の位にて、
年いと若くておはしき。菅原のちとゞ右大臣の位にて
おはします。その折、御門御年いと若くおはします。
左右大臣に、世のまつりごとを行なふべき宣旨下さし
め給へりしに、その折、左大臣御年二十八、九ばかり、

年もかへりぬ。ところどころ浦々、あはれなる事を
のみ思し歎く。佐渡院、明け暮れ御行なひをのみし給
ひつゝ、なほさりとと思さる。隠岐には、浦よりを
ちの、はる／＼と霞み渡れる空を眺め入りて、過ぎに
し方かきつくし思ほし出づるに、行くへなき御涙のみ
ぞとゞまらぬ。

うらやまし長き日影の春にあひて潮くむあまも
袖やほすらむ

夏になりて、芽替きの軒端に五月雨の平いと所せきも、
御覽じ慣れぬ御心地に、さま變りてめづらしく思さる。

あやめふくかやが軒端に風すきてしどろにおつ
るむらさめの露

初秋風の立ちて、世の中いとゞもの悲しく、露けさま
さるに、いはん方なく思し亂る。

ふるさとを別れ路におふるくずの葉の秋は來れ
どもかへる世もなし

たとしへなく眺めしをれさせ給へる夕暮に、沖の方
にいと小さき木の葉の浮かべると見えて漕ぎ来るを、
海人の釣舟かと御覽するほどに、都よりの御消息なり

右大臣御年五十七、八にやちしけん、共に世のまつ
りごとをせしめ給ひしほどに、右大臣は才も世にすぐ
れめでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかして
くおはしまし、左大臣は御年も若く、才も殊の外に劣
り給へるによりて、右大臣御ちばを殊の外におはしま
したるに、左大臣安からず思したるほどに、さるべき
にやちしけん、右大臣の御ためによからぬ事出で來
て、昌泰四年正月二十五日、太宰権帥になし奉りて流
され給ふ。

このちとゞの子どもあまたおはせしに、女君たちは
婿取りし、男君たちは皆ほど／＼につけて位どもおは
せしを、それも皆かた／＼に流され給ひて悲しきに、
幼くおはしける男君・女君たち慕ひ泣きておはしけれ
ば、小さきはあへなんと、おほやけも許さしめ給ひし
かば、共に率て下り給ひしぞかし。かた／＼にいと悲
しく思し召して、御前の梅の花を御覽じて、

こち吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしと
て春な忘れ

又、亭子の御門に聞えさせ給ふ。

流れゆくわれはみくづとなり果てぬ君しからみ
となりてとめよ

なき事により、かく罪せられ給ふをからく思し歎き
て、やがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。そのほど
極めて悲しき事多かり。日頃經て、都遠くなるまゝに、
あはれに心細く思されて、

君が住むやどのこずるをゆくゝも隠るゝまで
にかへりみしはや

又、播磨國におはしまし着きて、明石の驛といふ所
に、御宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へるけ
しきを御覽じて、作らしめ給へる詩いと悲し。

驛長無驚時變改、一榮一落是春秋

かくて筑紫におはしまし着きて、あはれに心細く思
さるゝ夕べ、をちかたにところどころ煙立つを御覽じ
て、

夕されば野にも山にも立つけぶり歎きよりこそ

燃えまさりけれ

又、雲の浮きて漂ふを御覽しても、

山わかれ飛びゆく雲のかへり来るかげ見るとき

を、御門かしこく感じ給ひて、御衣賜はせ給へりしを、
筑紫にもて下らしめ給へければ、御覽するに、いとゞ
その折思ひ召し出でて、作らせ給ひける、

去年、今夜侍清涼、秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此、捧持毎日拜餘香

この詩、いとかしこく人々感じ申されき。

このことも、たゞ散りゝなるにもあらず、かの
筑紫にて作り集めさせ給へりけるを、書きて一卷とせ
しめ給ひて、後集と名づけられたり。又、折々の歌を
書きあかせ給へりける、あつから世に散り聞えしな
り。

やがて、かしこにて失せ給へり。

八 オリンピック大會

現在の國際オリンピック大會は、古代ギリシャで行
なはれたオリンピック大祭を、西紀二八九四年に再興
したものであるから、これを現代オリンピックといひ、
古代のを古代オリンピックと稱へてゐる。

古代オリンピックはギリシャの主神ゼウスの神靈を

ぞなほたのまる、

さりととも、世を思し召されけるなるべし。月の明か
き夜、

海ならずたゞよふみづの底までも清きこゝろは

月ぞ照らさむ

これ、いとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそ
は照らし給はめとこそはあめれ。

筑紫におはします所の御門も固めておはします。大
貳の居どころは遙かなれども、樓の上の瓦などの、心
にもあらず御覽じやられけるに、又、いと近く觀音寺
といふ寺のありければ、鐘の響きを聞き召して、作ら
せ給へる詩ぞかし。

都府樓觀瓦五色、觀音寺只聽鐘聲

これは、文集の白居易の「道愛寺鐘聲枕畔」香爐
峯雪撥簾看」といふ詩にも、まさゝまに作らしめ給
へりところ、昔の博士どもは申しけれ。

かの筑紫にて、九月十日、菊の花を御覽じけるつい
でに、まだ京におはしましし時、九月の今宵、内裏に
て菊の宴ありしに、このおとゝの作らしめ給へける詩

慰めるため、四年ごとに一回、神前の庭でオリンピッ
ク大祭を催し、専ら高跳・競走・槍投・圓盤投・相撲
などの如きスポーツを行なつたのであるが、なほその
外に音楽・美術・辯論などの競争も行なはれた。この
大祭はたいてい夏季に行なはれたもので、祭典の行な
はれる一箇月の間は、ギリシャ全土にわたつて一切の
争闘を禁止して、絶對の平和が保たれるやうになつて
ゐた。當時のギリシャは小國が分立し、互に國力の擴
張に餘念がなく、常に小競合や戦争が絶えなかつた。
そこで、四年に一回は一定の期間だけでも争闘をやめ、
平和の氣分を得たいといふところから、オリンピック
大祭が行なはれたともいはれてゐる。

ともかく、オリンピック大祭にはギリシャ全土から、
各國それ／＼代表的の選手を出して盛んに競技を行な
ひ、その期間は全ギリシャに平和の氣分がみなぎつて
ゐた。この時も争闘を收へてするゝがあれば、神慮
に逆らふ者として、嚴しい制裁を受けたことは事實で
ある。スポーツによる争ひは行なはれたが、國家間も
しくは個人間の争闘は絶對に禁止されたといふのは、

一種の心理的妙味を含んでゐる。また競技に對する態度は極めてまじめで、選手に選ばれる者は競技の達人であると同時に、品性や人格もとりつばでなければならず、また體格も強健壯美であつて、いはばすべての點に於いて代表的青年であつた。さうして、その選定權は官吏に屬してゐたといふのもおもしろい。

また競技の行なひ方は頗る眞剣で、體力の盡きるまで、氣力の果てるまで熱心に争つたもので、拳闘などでは死に至るまで戦つた者もあつた。何しろ今日のやうに競技のやり方が科學的に考へられたものではなく、また人情も殺伐であつたから、行く所まで行くやうな激しい競争が行なはれたのである。しかし、當時に於いても卑怯なふるまひや陋劣な手段は堅く戒められ、いはゆる正々堂々の陣を布いて、全力を傾けて相競ふといふフェアプレーの精神は十分に發揮されてゐた。

かくの如くであるから、競技に優勝した者は絶大の名譽を負ふのはいふまでもなく、その名聲はギリシヤ全土に響き渡つたのである。しかし、これを表彰する

方法は極めて精神的で、神前に植ゑてあるオリブの葉で作つた冠が授けられるに過ぎず、決して物質的の褒賞を授けることはなかつた。こゝにも今日のアマチュアスポーツの精神が輝いてゐたのである。かく古代オリンピックは神に捧げる神聖な祭典として、ギリシヤ民族の平和的施設として、また純眞なスポーツ精神の發揚として、はたまた堅實な心身鍛錬の試煉として、まことに意義の深いものであつたことは言ふまでもない。

現代のオリンピックは、前にも述べたやうに、一八九四年に再興されたのであるが、その精神はギリシヤ時代のオリンピック精神に準じたことは言ふまでもない。また四年ごとに一回行なはれることも同様である。即ちアマチュアスポーツの確立と、フェアプレーによる競技の普及と、さうして純眞なスポーツマンシップを通じての國際親善とが大眼目となつてゐるのである。現にオリンピックのマークとされてゐる五つの輪の連鎖は、よくこの精神を表象してゐるのであつて、五つの輪は世界の五大洲を象り、五大洲にある各國氏

が仲よく手を連ねて行くべきことを示してゐる。また五つの輪にはいろ／＼の色が附いてゐて、アジャは黄、アメリカは青、ヨーロッパは緑、オーストラリヤは紅、アンリカは黒だといふ意味だとも言はれてゐる。しかも一つ／＼の圓輪は、明朗快活、純眞無垢で、スポーツの精神に相通するところがあるのである。

(山川建ノ文ニ據ル)

九 雪の研究

札幌の一月の氣温は大體零下七、八度ぐらゐである。凍りついた引戸を無理にあげると、廊下のコンクリートの路面から二尺ぐらゐも積み上つてゐる吹きだまりの雪が、音もなく崩れて、コンクリートの上へ流れ落ちて来る。そこで、ガラス板を紙に包んで外へ出して置いて、すっかり冷え切つたところを取り出し、降つて来る雪をその上に受け取つて顕微鏡でのぞく。顕微鏡の下に顯出した雪の結晶は寫眞で見たやうな形をしてゐるが、寫眞では黒白の線しかわからなかつたものが、こまかい小凹凸のために、繊細なあの模様の線に

空の光が反射して、水晶細工のやうな微妙な色が見えた。冷徹無比の結晶母體、鋭い輪郭、その中にちりばめられた變化無限の花模様、それらが全くの透明で、何らの濁りの色を含んでゐないだけに、その特殊の美しさは形容を見出すことが困難なぐらゐであつた。

しかし、完全な結晶は稀で、いろ／＼の形の結晶がまじつてゐるので、それを取りのけるのが一骨であつた。結局マッチの軸の頭を折つて、さ／＼くれた繊維の端でほしい雪の結晶をつるし出して、きれいなガラス板の上へ持つて来ることにしたが、どうも結晶が融けやすくて困つた。しかし、それは手の温みによる輻射熱と、手で温められた空氣の對流とによることがわかつたので、手袋をはめることにした。手から出る温みを遮断するために手袋を用ひるのはちよつと變に聞えるが、考へてみるまでもなく、すべての防寒具の目的と結局同じことなのである。

手袋をはめると仕事はます／＼めんだうになる。暫くやつてゐるうちに、い／＼外套を着込んでゐても、いつの間にか身體がすっかり冷えて込んで、氣がついて

みると、足は小さくみにコンクリートの上をとん／＼と踏んでゐる。あわてて暖かい室へ逃げ歸つて、スチームの放熱器に腰をかけて身體を温めたものである。次の冬には、正月休の前になつてうまいことを思ひついた。それは十勝岳の中腹千メートルぐらゐの所にある山林監視人用のヒュッテを借りることである。そこへ出かけて、雪の降る日は結晶の寫眞をとり、天氣のよい日はスキーをやらうといふ案である。

驛から五里の雪道を、原始林の間を縫ひ、馬槽で顯微鏡だの寫眞だの食糧だのを運ぶのは大仕事だつたが、計畫はみごと成功した。白樺の老樹のこまかい枝が樹氷に包まれて空一面に交錯してゐる間に、僅かばかりの空所があつて、その間を静かに降つて來る雪の結晶は、豫期以上に繊細巧緻な模様の構造のものであつた。風がなく零下十五度ぐらゐに氣温が下つた夜に、静かに降り出す雪は特に美しかつた。眞暗なベランダに出て懐中電燈を空に向けてみると、底なしの暗い空の奥から、数知れぬ白い粉が後から後から無限に續いて落ちて來る。それが大體きまつた大きな螺旋形を

描きながら舞つて來るのである。そして大部分のものはきら／＼と電燈の光に輝いて、結晶面の完全な發達を知らせてくれる。標高は千メートルぐらゐに過ぎないが、北海道の奥地遠く人煙を離れた十勝岳の中腹では、風のない夜は全くの沈黙と暗黒の世界である。その間の中に懐中電燈の光で一部分頭上だけ區切られた中を、いつまでも舞ひ落ちて來る雪を仰いでゐると、いつの間にか自分の身體が静かに空へ浮き上つて行くやうな錯覺が起つて來る。基華となるものがほかに何も見えないのだから、かうした錯覺の起るのに不思議はないが、しかし、その感覺自身は實に珍しいもので、今まで知らなかつた經驗であつた。

ヒュッテの部屋には眞中に大きなストーブがあつて、番人の老人が太さ三尺もあるりつばな丸太をしげもなくどん／＼燃してくれる。そこで十分暖まつてから、防寒外套を着てベランダに出て寫眞をとる。顯微鏡寫眞の裝置は固定したまゝ、ベランダに出し放しになつてゐるから、暫く休んでゐる間に、水鳥の胸毛よりも軽い雪がもう何寸も積つてゐる。軽いといへば、

十勝岳の眞冬の降り立ての雪ぐらゐ軽いものは少いだらう。比重を測つてみると百分の一よりも小さいことがある。まるで空氣ばかりのやうなもので、緩日の難沓の中で銅の鹽をぐる／＼廻して作つてゐる綿菓子のような感じである。こんな雪はさつと拂ふとすぐ飛んでしまつて、そのまゝ仕事を続けるのに何のじやまにもならない。こゝは冬の六箇月の間、氣温が零下五度以上に昇ることは殆どなく、水といつても状態は固體で、液體のものは例外的に見られるだけだから、全く水の中に埋つてゐるはずなのに、物が濡れるといふ心配は先づない。高價な顯微鏡を雪の露天にはふり出してゐても、乾いた布で拭ふだけの注意をしてをれば何の故障も起らない。餘り大切にしていゝ暖かい部屋へ持ち込んで掃除などすると、温度の急變と雪の溶けるために却つてゐる／＼な故障が起る。たゞ注意すべきは水で、液體の水はこゝでは一種の危険品だから、過つてベランダの床の上などにこぼさうものなら、忽ち凍りついて、その後は危く歩くこともできなくなる。

結晶は融ける心配はないから、いくらでもよい寫眞がとれるはずであるが、實際は初めのうちはなか／＼うま／＼行かなかつた。ぐ／＼してゐるうちに、かんじんの一番繊細な模様が昇華作用で消えてしまつたり、最も大切な珍しい結晶に、息が吹きかゝつてしまつたりして、思ふやうに簡單には行かなかつた。

ところが、十勝行もその年のうちに二回、次の年に三回といふふうになび重なると、不思議なことには雪の結晶がだん／＼大きく見え出し、ガラス細工か何かのやうに勝手にいち／＼廻すことさへできるやうになつた。どうも雙生兒の結晶らしいと思はれるものは、兩方から引つばると、ちやんと二つにわかれた。寺田先生の隨筆に、ガラスの面に作つた絹絲ぐらゐの割れ目を顯微鏡で毎日のぞいてゐると、小山の中に峽谷があるやうに見えて來る、さうなるといふ／＼の現象がわかつて來る、といふやうな意味の一節があつたが、さういふことはあるものだらうと思つた。

十勝岳では、水晶のやうな六角柱の雪の結晶で、兩底面に六花の板狀結晶がついて、ちやうど鼓のやうな

形になつたものがよく降つて来る。さういふ結晶は何とかして顕微鏡の下に垂直に立てて、その側面の寫眞がとりたい。いろ／＼試みて、唾を使ふのが一番よいとわかつて、マツチの軸の先をちよつと舐めて、ガラス板をそつとつゝいた。唾の非常に小さい滴がガラス板の上につく。唾は、氷點が低いと見えて、暫くは過冷却の状態で、液状の微滴のまゝになつてゐる。そこで今一本マツチの軸の頭を折つたもので結晶をつるしながら、ちやうど結晶が垂直に立つやうに、その一端を唾の滴にふれさせる。すると今まで過冷却の状態にあつた唾の滴は、その瞬間に凍つて、結晶は垂直にガラス面にうまく凍りつくのであつた。このやうにしていろ／＼の結晶に側面寫眞をとつてみると、平面寫眞ばかり見てゐたのではどうしてもわからなかつたことが、あつけないくらゐ簡単にわかつて来るのでとてもおもしろかつた。

十勝岳の思ひ出は皆なつかしいことばかりである。冬の深山の晴れた雪の朝ぐらゐ美しいものは少いであらう。登山家やスキー家たちが生命の危険にさらされ

ながらも、冬の山へ出かけて行く氣持がわかるやうな氣がした。

(中谷宇吉郎ノ文ニ據ル)

十 國文學の傳統

昔から今日までのわが國の文學を通觀すると、その發達の根柢は和歌であるやうに思はれる。和歌は、縦にも横にもわが國の文學を貫ぬいてゐる。人も知る如く、歌は歴史と共に古く、わが國には、支那の文學もインドの佛教もはいつて來ない以前に、既に和歌といふ獨得の文學があつたのである。

この固有の歌が支那文學の影響を受けて一層發展し、奈良時代文學の主流をなしたのである。平安時代には、著しく和文が發達した。ところが、この和文の起源はやはり歌である。日記とか物語とかいふ平安文學は、歌から出て來たものである。おもしろい歌があれば、人は、それがどういふ時に、どうして出來たかといふ由來・縁起を聞きたがる。即ち、その歌の出來た事情を知りたがるのである。そこで、歌のいはれ因

縁を書いた物語が出来ることになる。萬葉集卷十六はそれである。しかし、これは漢文で書いてある。和文で歌の由來を記した物語が出來たのは伊勢物語が初めて、續いて大和物語などが出來た。これらは、種々の場合に詠んだ歌に就いて、一つ／＼由來を説いたもので、それが集つて物語をなしてゐるのである。私は、これを歌物語と名づけてゐる。

歌物語のやうに断片的でなく、自己の境遇を中心に、種々の場合に應じ、種々の時に臨んで作つた歌の由來を書き集めたのが歌日記である。蜻蛉日記とか、和泉式部日記とかいふのは皆この類である。これは自分の和歌を年代を逐うて書き繼いだものである。又、他の人物を取り立て、趣向を構へて書いたのが、源氏とか宇津保とかいふ物語をなし、それが一轉して、大鏡や榮華物語といふやうな歴史物語となり、更に鎌倉時代に移ると、時勢の變化に伴なつて、源平盛衰記とか平家物語とかいふやうな軍記物語となつたのである。

鎌倉時代には、漢文と和文が融合して來た。朝廷では和歌を重んじ、歌學も盛んに興つて來た。當時、學

問といへば佛學と歌學の二つで、公家は歌學、僧侶は佛學といふやうに分野があり、更にこの二つが結び附いて出來たのが當時の文學であつた。軍記物語もそれである。室町時代に至つて、それが戯曲化されて、謡曲となつた。謡曲には歌の講釋もはいつてゐるし、佛教の講釋もはいつてゐる。謡曲の半面は和歌によつて形づくられてゐるので、謡曲は歌の趣味の上に成り立つてゐるといつてもよいのである。

次に、連歌も歌から起つて來たのである。歌の法則が漸次嚴しくなつて、作ることがむづかしくなり、又、言葉が漸次昔と異なつて來て、歌を學ぶことが困難になつた。その上、歌は神聖なもので、愼み半分に作るには適したものではない。それには、餘り規則のない、連歌がよいといふので、これを作る遊戯が始つた。これが源となつて、鎌倉・室町時代に連歌が流行したのである。歌が根柢になつてゐることはもちろんである。それから連歌がまた一變し、その發句だけが獨立して、一つの短い形の詩が出來た。即ち十七字の俳句である。又、江戸時代の文學の主なる一つは淨瑠璃である。こ

これは畢竟謠曲をや、通俗化したもので、謠曲を平民化したのがその起源である。謠曲は上流・中流の社會に用ひられて、一般の平民社會には淨瑠璃が盛んに流行して來たのである。

かくの如く、わが國の歴史の文學を通觀すると、和歌がその根柢になつてゐることは争はれぬところである。

さて、平安時代の物語は、當時の人にはおもしろく讀まれたであらうが、今日では讀むことがむづかしくなつた。謠曲や淨瑠璃は今日も勢力があるけれども、連歌の如きは衰へてゐる。文學の種類は時代によつて盛衰あるを免れぬものである。然るに、歌だけはいかなる時代に於いても必ず流行してゐる。上古から奈良時代、平安時代、鎌倉時代に至つても衰へず、室町時代・江戸時代にも盛んであつた。明治時代に至つてもなか／＼勢力があり、現在は教育の普及と共に、歌を詠む者が益々多くなつた。和歌だけは古往今來、毫も衰へ退せざるのみか、益々盛んである。

元來わが國の文化は、自國の文化がまだ十分發達し

ない前に、インド・支那の文學や宗教と接觸し、更に西洋の文化を攝取し、これを咀嚼同化して、遂に現代の文化を作るに至つたのである。外國文化の特徴を採り、漸次發展して今日に至つたのである。然るに、わが國の文化中、まだ少しも外國文化の影響を受けぬ時代に出来てゐたのは歌である。純粹なわが國の文學はといへば歌である。片假名や平假名のない時代から、日本人は歌を作ることを知つてゐた。その後、外國の文學に接しても、國民は自國特有の歌だけは忘れなかつたのである。

奈良時代には、詩を作り漢文を作ることが盛んに行なはれて、朝廷の學問は専らそれに據らなければならなかつたが、歌はそれに相對峙して行なはれた。朝廷では、文人を召して詩文を作らせると同時に、歌を作らせられた。他の學問はたとへ支那に劣つても、歌だけは日本古來の文學として獨立してゐた。さうして、片假名や平假名が發達して、自由に國語を書き表し得ることになつてからは、勅撰集も出來た。これによつて歌と皇室とが一層深く結び附いて來た。又、勅撰集

に載せる歌は、官位の有無に拘らず、時の攝政・關白でも歌がまづければ採らず、いかなる匹夫匹婦でも歌がよければ撰に預つた。それ故、勅撰集にはいつたものは非常な名譽と感じたのである。勅撰集に一首でも採録されることは、西行法師や鴨長明のやうな名人でも、非常な榮譽としたのである。

歌は純日本的なものとし、漢文學の行なはれた時代にも、それに對して存続し、俗文學の行なはれた時代にも、またそれに對して盛んに行なはれたのである。かくして、歌は日本特有のものとして、或は「數島の道」と呼ばれ、或は「言の葉の道」と稱へられて、全國民の必ず知らねばならぬ道として、愈々深く浸みこんで來たのである。

(芳賀矢一ノ文ニ據ル)

K240.8-12

58. 8. 31

文部省密達入為